のように日本仏教は、鎌倉期に盛んになった禅および法然・親鸞の浄土系思想がともに無戒の立場を宣揚することを通してラディカルな転換をとげ、一つの頂点に上りつめたと言うことができると思います。なぜなら、ここに仏教の奥義「煩悩即菩提」が現実のものとなったからです。

渋柿の　そのまま甘し　吊るし柿。

第一七話　蛸を食っておらぬ（一休）

一休さんは蛸が好物であった。ある日、自坊で蛸をたらふく食べた後、檀家に出かけて行き、そこで具合がわるくなって吐いてしまわれた。それを見た檀家の人たちは、「一休和尚は仏様のように思っていましたが、蛸を召し上がるとは生臭坊主ですなあ」と、嘲り笑った。すると、一休は少しも騒がず、「わしは蛸は食べておらん」と言い張った。亭主が、「口から吐き出したものを食わぬと言い張りなさるか」と、追い打ちをかけると、一休の言うに、「浄土教の善導大師は阿弥陀を食べたことはないが、口から阿弥陀三尊が出ていらっしゃる。善導さんでさえ、食べないけれども、口から出る阿弥陀様をおさえられない。ましてわたしのような愚僧が、食べないが、口から蛸が出るとは、

さらに仕方のないことじゃ」。

（三瓶達司十禅文化研究所編『一休ばなし集成』）

この話をいわゆる頓知（とんち）ばなしとだけ見てはなりません。禅の立場で見れば、一休さんの主張は間違ってはいないのです。一休さんは蛸を食べても実は食べておられなかったのです。そのわけは、食べるときは食事三昧、食べることも忘れるのが禅者の行き方だからです。禅僧はお酒もよく嗜みます。酒のことを般若湯（はんにゃとう）（智慧の涌く湯）と呼んだりしています。飲むと口が滑らかになるからでしょう。ただし、「酒は量なし」であっても、「乱に及ばず」でなければなりません。酔っぱらって羽目を外すことは、見ていて格好のよいものではありません。

頓知と頓悟

檀家さんに責められて、一休さんが持ち出した言い訳の部分は得意の頓知の部類に属しましょう。頓知の「頓」は「すぐに、急に、にわかに」の意味で、「漸」（よ

うやく、しだいに）に対して使われます。禅の世界では、「直覚的に得られた悟り」のことを「頓悟」、「順序次第を経て得られた悟り」を「漸悟」といって区別しています。ですから、「とっさの知恵、機知」と説明されるいわゆる頓知は頓悟と似ていますが、普通の場合、頓知が有心から出た知恵であるのに対して、頓悟は無心から出た直接智（直覚）である点において決定的に違っています。

一休さんと蓮如上人

善導大師（六一三―六八一）は中国、唐初の僧で浄土教の大成者です。日本の法然・親鸞に多大の影響をあたえました。善導はもちろん阿弥陀を食べたことなどはありませんでしたが、口から自然に「南無阿弥陀仏」と念仏が出たという意味です。一休さんは浄土真宗の中興の祖である蓮如上人（一四一五―一四九九）と親交のあったことが知られています。一休さんの善導大師への言及にはそのような背景も考慮に入れておいてよいのかも知れません。一休さんには、

わけのほる　ふもとの道は　おほけれと

おなし高ねの　月をこそ見れ

という歌にも示されていますように、宗派に囚われない寛容の心がもともとあったようです。

一休さんの「蛸を食っておらぬ」の話に因んで、一つ公案を引いておきましょう。

「或庵曰く、西天の胡子、甚に因ってか鬚無き（達磨さんにはどうして鬚がないのですか）」（『無門関』第四則）。さあ、皆さんはどう答えますか。

第一八話　わしんとこの肉はすべて上等じゃ（盤山）

盤山宝積禅師が一日、街に出て肉屋の前を通りかかったところ、ひとりの客が肉屋の前で、「上等の肉を一斤もらいたい」と、注文しているところに出くわした。すると突然、肉屋の主人は叉手して、「わしんとこの肉はすべて上等じゃ」と言ってのけた。盤山はそれを聞いて悟りをひらいた。

（『五灯会元』巻三）

叉手当胸

叉手、すなわち叉手当胸（胸の上で両手を重ねる）は無字の形姿とされ、無の体得をめざす雲水（禅の修行僧）は立っていたり歩いたりする時には、手をぶらぶらさせず、叉手当胸することが作法となっています。雲水が手をぶらぶらさせて歩いている姿はいかにもだらしなく見えますが、反対に叉手当胸している姿を見ますと、心が一点に集中した緊張感が伝わってきて、思わずこちらもしゃんとした気持ちにさせられるものです。

この話のミソは、肉屋の主人が叉手当胸をして客に対応したところにありそうです。つまり主人は無になって「わしんとこの肉はすべて上等じゃ」と言ったわけですが、無になっていた以上、一切の分別や差別は超えられていたことになります。ですから、そこでは肉の質に関しても上等下等の沙汰はなくなります。盤山はその辺の消息にうなずくところがあったに違いありません。後になって、その客は「わしはつまらんことを言うてしもうたわい」と悔いたかもしれませんね。

古本屋での経験

わたしにもこれに少しだけ似た経験があります。学生の頃でした。大阪の天満橋近くに、ときどき覗く洋書専門の古本屋がありました。洋書の場合、そのタイトルを判読しようとするには、横文字ですから、こちらの首を横に傾けなければなりません。長くそうやっていると首や肩も凝ってきます。あるとき、そんなことをしているうちに疲れてきて、面倒くさくなったものですから、店の主人に「何か面白い本はありませんか」とつい横着をしてしまいました。すると、薄暗い奥の方から返ってきた店主の返事が、先の肉屋の主人と似ていて、「うちには面白くない本なんかおいておまへん」と、大阪弁でのひどいしっぺ返し。まだ生意気盛りの若造にすぎなかった当時のわたしは、その言葉にぎゃふんと言わされて、すごすごとその店を出ていったものでした。もしあの時、店の主人が叉手当胸していたらと今は夢想しますが、万が一、そのようなことがあったとしても、あの頃のわたしではとても契合することはかなわなかったでしょう。

第一九話　庵を焼く（婆子）

昔、ある老婆がいつも十六くらいの娘に飯を運ばせて、ひとりの庵主を二十年もの間、供養しつづけた。ある日娘に、庵主を抱きしめて「このようなときは如何でございますか」と問わせるようにした。すると、庵主は、「古木寒巖に倚り、三冬暖気なし（古木が寒巖に寄りかかった、暖気のない真冬のような境地だ）」と答えた。娘からその答えを聞いた老婆は、「わたしは二十年もの間、ただひとりの俗漢を供養しただけだった」と言って、庵主を追い出し、庵を焼き払った。

（『五灯会元』巻六）

この話は「婆子焼庵」の名で知られ、公案の一つとなっています。話中の